No.

Date 26/10/1

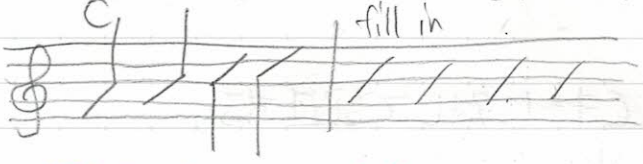
pp.71~78

◦スケール理論

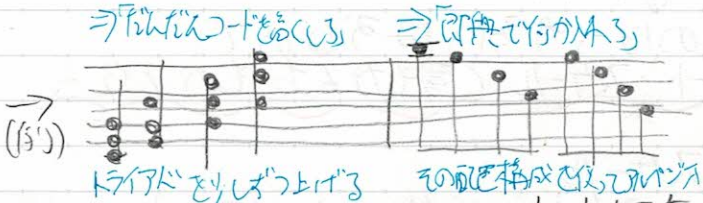
アレンジのときにコードの音だけでは足りない、他も使いたい

↓

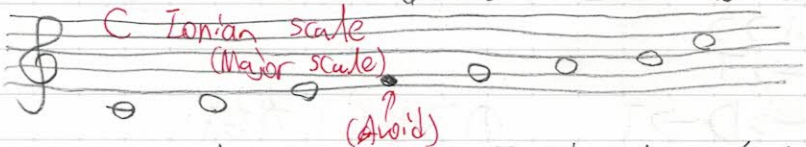
スケールの形で使える音を探す、スケール理論



左の2小節のような指示を受けた場合を考える。



↓これをスケールに書き直すと…



CはCキーのトニックコード ⇒ IV音以外は自由に使える。

使えない音はアボイドノートとして、避けるよう注意喚起する。

⇒このように、キー/ディグリーを分解・分析し、使っていい音をスケールの形で示したのがコード・スケール

・テンション・ノートとディスコード

(例)トライアドに対して、

・9th/6th/7th/Δ7thは無条件で、

・#11thはセブンスカインスで含む場合に付加可能。

ただし……7thを付加したCは独特の、不協和とも違う響きに変化する

(セカンダリー・ドミナント・セブンスコード)

このようなT/D/Sとも違う役割りのコードのことを

テンション・コードという

一方、上記から外れるコードは不協和、つまり不協和音

不協和音を生む付加音でディスコードという。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836BT 6 mm ruled×36 lines
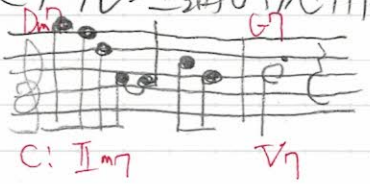
・コード・スケール
(ないし、アベイラブル・スケール/アベイラブル・ノート・スケール)
⇒コード・トーンと付加可能なテンション・ノートでスケールの形でまとめたもの。

・キーとコード
コード・スケール、基本的にはCキーに対して記述する
↓
実際にはCキーじゃない曲のほうが多いはずなので、
各キー(調号)ごとにコード・スケールで書きかえたものと仮う。

・コード進行のアナライズとスケール
少し話を戻して… コード進行の分析は前後コードとそのキーが必要。
コード進行はふつう
{ T→D→T
{ T→S→D→T　　の3種類しかない。
{ T→S→T
(例) F→B♭7→C というコードが与えられたとも、
(i) Cはどう考えてもT。
(ii) B♭7についてはDとSどちらの可能性もある。
(iii) Fは「T→D→T」か「T→S→D→T」の型のてぬけたやつのどちらかだが、ここは素直にTと考えておく。
⇒IV→VII7→I が T→(S/D)→Tの形でなければならず、よってこれを満足するキーはCになる。

・アナライズしてわかったキーとディグリーからコード・スケールで書き、これを使ってメロディのアレンジを考えていく。

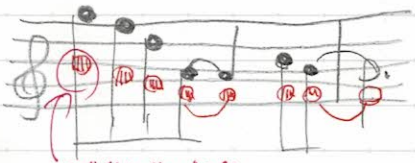
・スケール理論の応用



メロディーが左のように与えられたとき、
ハーモニーはどうする？
↓
1小節目がCのIIm7 ⇒ドリアンスケール



Avoid
⇓



(例) メロディーに対して6度になるような
アレンジ

アボイドではあるが
もわやて気いので突っもっていい。

・モード

モード：旋法、メロディーの「あり方」を示す
これもスケールの形で書かれ、使える音高を示した上で
アレンジを考えていく。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-836BT 6 mm ruled×36 lines